北原白秋全集

9

庄野英二全集

9

偕成社

庄野英二全集　第九巻

印　刷　昭和五十四年五月二十五日

発　行　昭和五十四年六月十日

著　者　庄野英二（しょうの えいじ）

発行者　今村　廣

発行所　株式会社　偕成社

〒一六二　振替　東京五―一三五二番
東京都新宿区市ケ谷砂土原町三の五

電話　東京（〇三）二六〇―三二二一（代）

印　刷　新興印刷製本株式会社

製　本　文勇堂製本工業株式会社

定価　二五〇〇円

乱丁本・落丁本はおとりかえいたします。

©EIJI SHÔNO Printed in Japan 1979

庄野英二全集　第九巻

装幀カット　庄野英二

装幀協力　山高　登

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

目

次

ロッテルダムの灯……9
ロッテルダムの灯 11
ホークス酒場 14
クリスマス＝キャロル 16
母のこと 20
松花江 29
カーネーション 33
椿 35
美校出の兵隊 38
菜の花 45
サンパギータ 46
おうむ 49
菊 53
バラ 57

長い航海　60
カトレア　66
茉莉花少女　68
そばの花　78
阿波丸の乗客　81
カンカン虫　85
ジャーデン美術学校　87
相思樹　91
借りた本　94
ベルリンの動物園　97
フィレンツェの橋　99
砂漠の町　104
うつぼかずら　107
はり絵　109
マカロニイ　112
ダンクウェル　117

愉快な騎手 126
マリーゴールド 129
短い手紙 131
帝塚山風物誌 153
洋風館 155
赤蝸房付近 161
万代池 169
大領池 177
帝塚山会館 183
自然堂 191
姫松教会 194
続 赤蝸房付近 200
安井理髪店 207

満洲堂 213
橋本多佳子さん 218
井葉野篤三さん 226
二人の洋画家 232
杉 236
ポプラ 243
ユーカリ・プラタナス 250
桜 255
久保田の坂 259
友だちの家 276
西野邸付近 295
阿倍野神社と校歌 308
父母の家 315
兄弟の部屋 327
帝塚山 337

子供のころ……347
ほうたい……349
のみ……355
泊まり客……362
失敗……371
ナミさん……376
あとがき……384
庄野英二全集 第九巻解題　戸塚惠三……386
庄野英二覚え書　前川康男……390

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

ロッテルダムの灯(ひ)

ロッテルダムの灯

講和条約が発効して日本が独立した年の七月、私はヨーロッパへの旅に出かけた。

朝鮮での南北戦も終わり、いちおう世界は平和だった。

羽田を発ったのが朝の六時、台風が南九州に近づいていたので、沖縄までは大荒れであった。

沖縄で給油のため着陸したときは、風を伴ったひどい土砂降りであった。スチュワーデスが、ビニールのレインコートを着せてくれた。タラップをおりて米軍のかまぼこ兵舎のレストランへいき、小憩しなければならなかった。中国の婦人客もいたが、風で倒されそうになって斜めになって走っていた。ビニールのレインコートがぴったりとまきついて、中国服の身体の線がなまめかしく美しかった。

かまぼこ兵舎のなかは、作業服や戦闘服の米軍の兵士たちで満員であった。ここにはまだ戦場の空気がそのままたちこめていた。

私は室内がむし暑く空気がにごっていたので屋外に出て、ひさしの陰で滑走路に並んだジェット機やアメリカの軍用機を見物することにした。

そのとき、私よりも先に一人の男がひさしの陰にしゃがんでいるのに気がついた。

（その人は私と同じＢＯＡＣの乗客であることがわかった。）
その男は軍服を着た白人であるが、どこの国の人かわからなかった。首から白い三角布で右腕を吊っており、スリッパをはいていた。
その男はポケットから煙草をだして、左手だけで不自由そうにマッチをつけようとした。私は近づいていってライターで火をつけてやった。
サンキューともいわなかった。そしてうつろな目で滑走路をながめていた。
滑走路では、激しい雨のなかをジェット機が忙しく離陸したり、着陸したり、ジープがしぶきをあげて走ったりしていた。
その晩ＢＯＡＣ機は香港でナイトストップ、翌朝よりまた飛行をつづけた。途中、バンコック、ラングーン、カルカッタ、カラチで小憩した。翌朝アラビア砂漠の上で夜が明けた。ダマスカスで着陸し、今度飛び立つやウルトラマリンの地中海の上に出た。キプロス島の上空を通り、もうすぐアテネが見えるはずだ。そのとき、私はうしろのソファーのある喫煙室で子どもの騒ぎ声が聞こえてくるのに気がついた。
昨夜どこから乗りこんだのか、幼稚園くらいの年齢の男の子が三人乗っていた。兄弟のようであった。笑い声をたててマクラを投げあいながら遊んでいるのであった。
いや、子どもたちが三人だけで遊んでいるのではなくて一人の大人に遊んでもらっているのであった。子どもたちの遊び相手は、右腕を三角布で吊った兵士であった。スリッパばきの兵士は、左手でマクラを軽く子どもたちの顔に投げつけたり、投げ返されたりしていた。

子どもたちが遊びあきたころ、私はソファーの席へ雑誌をとりにいった。そのとき、兵士がいたので話しかけた。

彼は昨日と別人のように話しだした。

彼は東京にあるアメリカ陸軍病院からイギリスへ帰る途中であった。

「私は朝鮮戦線で負傷して東京へ送られてきたそうです」といった。他人ごとのようなもののいいかたであった。けっして私の英語の聞きちがいではない。

彼は朝鮮における戦闘のことも、またどのようにして朝鮮へいったかも、ぜんぜん記憶を失っていて思いだせないということであった。

「私が最後にたったひとつだけおぼえていることは、軍用船の甲板の上からロッテルダムの港の灯をながめたことです」といった。

そのころ、遠く右手にトルコの山々が雪をいただいて砂糖細工のように光っていた。

（一九五九・一二・四）

ホークス酒場

皇太子についていった日本人記者団が、ケンブリッジの某ホテルをリザーヴしたところ、ホテルの主人や使用人が、かつて日本軍の捕虜であったため宿泊を拒否したという記事が、先日の新聞に小さく出ていた。私は昨秋、天理図書館長の富永牧太氏とケンブリッジを訪れ一泊したが、今度、記者団のリザーヴしたホテルとはちがっていたのであろうか、なにごともなかった。また外交的に洗練された国家とて、滞在中いちども不愉快な印象を受けたことはない。

そのときの日記を開いてみると、ロンドンのリヴァプール駅より一時間三十六分でケンブリッジ駅につくと、大学のキーデル教授が出迎えてくれており、まずバスで彼の家へいった。つたの美しく紅葉した家のなかには、万葉集はじめ和漢の書が、たなを埋めていた。それから図書館やカレッジを案内していただいたのだが、ケンブリッジの町全体が公園のようで、静かな森と河とローンのあいだに古いレンガ建てのカレッジが散在していた。カレッジのレンガの裾を洗って小流が流れているのは、ヴェニスをまねてつくったのだといわれている。

図書館は十八年前に新設された白亜で、古色蒼然たる赤レンガのカレッジとは面目をかえている。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.